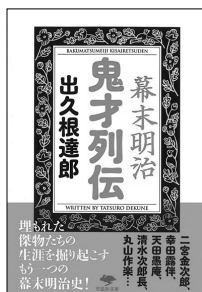


ブックレビュー



『幕末明治 鬼才列伝』

出久根達郎 著

草思社 刊

定価 1,045円 (本体950円+税)

書店で本書を手にした理由は、帯のキャッチに「埋もれた傑物たちの生涯を掘り起こすもう一つの幕末明治史!」とあり、二宮金次郎、幸田露伴、天田愚庵、清水次郎長、丸山作楽…」の名が列記されていたからだ。二宮金次郎（尊徳）といえは、彼の報徳思想は協同組合に浅からぬ縁があるのは周知の通り。

手元にも、作家の童門冬二が描いた『小説 二宮金次郎』（集英社文庫）あり、農協参事などを歴任した八木繁樹による『定本 報徳読本』（緑蔭書房）などありと際限がない。そんな金次郎を、古書店を営むかたわら文筆活動で直木賞を受賞している作家の出久根達郎がどう綴っているかに興味が湧いた。

文庫の1ページごとに小見出しをつけた軽妙な展開がスピーディーで、「小説巧者」の自在な文章と肩肘張らない話術にたちまち引き込まれた。

出久根は中学卒業後、職を求めて現在の茨城県行方市から上京した1944年生まれ。「苦労人」の視点で細部に光を当てたたかな語り口こそ、出久根の真骨頂だろう。

筆頭の金次郎伝もそうだが、露伴を始めとする幕末明治の「鬼才」たちにかかわりを持つ数えきれない登場人物の姿も躍動的だ。出久根の巧みな素描に乗って出没する個性的な群像をまぐるしく追いかけているうちに、往時の日本人の奔放な逞しさや骨太の生き方が目の前に迫ってきた。

本書は、2015年に草思社から刊行された『幕末明治 異能の日本人』を加筆・修正・改題し、文庫に収められた。この『鬼才列伝』で出久根は何を描きたかったのか。激しく流動する『幕末明治』という時代だったのではないか。近現代の土台を踏み固めた往時の日本人の「原像」から、私たちは何を汲み取るべきか。コンパクトだが、インパクトのある『列伝』だ。
さんかいの げん
(山海野 玄)